

女子学生の人生計画と

「女性であること」に対する評価との関係

池 田 政 子
安 富 利 光

戦後30余年、女性の生活全般にわたる変化には著しいものがあるが、この変化を女性自身がまた男性がどう評価しているか。これを反映する一つの資料として、「男女どちらに生れたいか」という問に対する、1953年と1973年の調査結果がある。¹⁾（統計数理研究所「国民性調査」）。戦後間もない第1回の調査では、女性の「女希望」は27%であったのが、20年後には50%に増加している反面、「男希望」も47%ある。一方、男性の「男希望」は94%と89%であり、大きな変化は認められない。この男女の反応の変化の相違は何に拠るものであろうか。同調査での「男女どちらが苦勞が多いか」との問に対しては、20年間で男女とも「男」との回答が1割程度増加しており、特に女性では第1回で「女が多い」が「男が多い」を上回っていたのが第2回では逆転する結果となっている。また、1975年の「男女平等に関する世論調査」²⁾（総理府広報室）によると、「レジャーを楽しむ機会」「文化活動の面」については、男女とも、「平等である」が「平等でない」を上回ったが、「社会通念やしきたりの上で」、「職場では」については男女とも「平等でない」との回答が6～7割を占めた。さらに「家庭では」との問には、女性は「平等でない」、男性は「平等」との回答が多かった。個人の生活史上のある時点で自らの性を肯定するか否かは、過去の生活体験を基盤として、このような理念としての「男女平等」の実現度についての認知、社会的な性役割期待についての認知などの要因が関

与してくると思われる。

「女性の生活史」研究会³⁾の1975年の調査においては、「男女どちらに生れたいか」という項目に加え「女性に生れて良かったと思うか」との質問項目を設け、「女性であること」に対する評価を、

1. 現在の自分の性の受容・拒否（以下「女性生の受容」と略す）
2. 「もし今の日本に生れるとしたら」という仮定の下での「性の選択」

とに分けて考慮し、各々の理由につき自由記述を求めている。伊藤他（1977）³⁾の既婚者についての結果では、「女に生れてよかった」とする者（受容群）74%、このうち、再び女性に生れることを希望する者（「受容一女」群）79.6%次は男性に生れたい者（「受容一男」群）20.4%であるのに対し、「女に生れて良かったと思わない」者（拒否群）は26.0%、うち「拒否一女」群13.4%、「拒否一男」群86.6%となっており上記2つの設問への反応がある程度の連関を持つ一方で、必ずしも一致しないことを示した。また本田他（1978）³⁾は世代差について検討しているが、女性生の受容群の比率は既婚者については「大正生れ」が一番高く、次いで「昭和10年代生れ」、「戦後生れ」、「昭和1桁生れ」となっており、戦後の転換期に青年期を送った「昭和1桁」世代の特徴が指摘された。更に、既婚者の「自分の娘に期待する職業経歴類型（CP）」との関連では、「受容一女」群の者に最も多く選択されたCPは結婚時退職（B）型、「拒

* 本田時雄（文教大学）、田代俊子（県立新潟女子短期大学）、福井とみ子（弘前大学）、川浦康至（東京都立大学）、山村香苗（東京大学附属病院）、伊藤裕子（筑波大学）、池田政子（山梨県立女子短期大学）

否一男」群では就業継続（D）型とB型がほぼ同じ選択率であった。²⁾池田他（1978）⁴⁾の結果では、既婚者について、「自己のCP」が、B型である者の方がD型の者よりも「受容一女」反応がやや多く、未婚者ではこのB群とD群の差が既婚者よりも著しいこと、ただし、「拒否一男」反応は、各世代、CP共通して1～2割であることが示されている。このように、少なくとも、結婚時退職というCPの選択と、「女性であること」の肯定に関し一定の関連が指摘できる。

自由記述形式で求めた「理由」に関しては、「女性であること」の肯定が必ずしも「子を産み育てることができる」等の積極的なものでなく、「男性は大変だから」等の消極的理由も多いことが報告されている。^{2), 5)}また既婚者については、本人のCPとの関係を個々の事例に即して検討することが試みられている。²⁾

§ 1. 目 的

本研究の主要な目的は、これから結婚・出産という転換点を迎える大学生女子が、現在「女性であること」をどう把握し評価しているか、また、それが将来の人生計画とどのような関係を持つかを分析することである。このため次の点につき検討する。

1. 女子青年の理想とする職業経歴および就業理由
2. 「女性であること」に対する評価の「理由」のカテゴリー化
3. 「女性であること」の評価と職業経歴類型との関係

§ 2. 方 法

「女性の生活史」研究会の調査用紙（1975年）の一部を改訂したものを使用し、集団調査した。

1) 分析項目

「将来の人生計画」（田代⁶⁾(1974)と同様に、20才から60才まで一年ごとに目盛をつけた年表形式のものに、結婚・出産、職業、社会的活動、趣味その他の四つの分野につき記入を求めた）

「就業理由」（結婚前、結婚・出産期、子育て期、子離れ後、中・老年期の5つのライフステージを設け、10項目の選択肢より各ステージごと第2位までの選択を求めた）

「妻が生活費を負担することに対する意見」「女性に生れて良かったと思うか」、「もし今の日本に生れるとしたら男女どちらがよいか」および「その理由」（自由記述）

2) 調査対象 山梨県内の二年制短期大学2校の女子学生161名、四年制大学1校の女子学生79名の計240名。平均年齢19.3才。出身地は山梨県が63.3%残りは28都府県にわたる。

3) 調査期間 1978年10月。

§ 3. 職業経歴類型と職種、就業理由との関係

「将来の人生計画」のうち、結婚・出産と職業の2分野の回答について、池田他（1978）⁷⁾での既婚者の場合の職業経歴類型（以下CP）設定の手続きに準じて整理した結果、表1の下位類型（以下CP-S）を得た。

表 1 未婚者の理想とする職業経歴類型

既婚者での類型	下 位 類 型		人 数	計	既婚者の下位類型との対応
A 非就業結婚型	以後 就業せず	A-1	2	2	A ₁
B 結婚時退職型	以後 就業せず	B-1	21 (34.4)	61 (100.0)	B ₁
	末子×才より 家内就業 パート勤務 フルタイム勤務	B-21	11 (18.0)		B ₂
		B-22	12 (19.7)		
		B-23	7 (11.5)		B ₃
	以後家内就業、あるいは家内就業後パート勤務	B-3	10 (16.4)		B ₅

C 出産時退職型	以後就業せず	C—1	12	(20.3)	59 (100.0)	C ₁ C ₂
	末子×才より { 家内就業 パート勤務 フルタイム勤務	C—21	9	(15.3)		
		C—22	9	(15.3)		
		C—23	17	(28.8)		
	以後家内就業あるいは家内就業後 パート勤務	C—3	12	(20.3)		
D 就業継続型	50才以後まで継続	D—1	51	(44.7)	114 (100.0)	D ₁ D ₂
	末子×才（本人50才未満）で退職	D—2	23	(20.2)		
	末子×才で転職（多くは家内就業）	D—3	33	(28.9)		
	結婚前より家内就業	D—4	7	(6.1)		
そ の 他					4	(全 240名)

() 内は百分率, 以下の表についても同様。

1) 既婚者のC Pとの比較

既婚者の場合の現実のC Pと比較すると, 結婚後家業従事型(E)に対応するものがないがこの型は結婚相手の条件に依存する面が大であり, 当然であろう。「家内就業」の内容は, 既婚者では「内職」が多数を占めたが, 今回対象とした未婚者の場合, 「家内就業」をある時期に行なうことを希望している者79名のうち, 「内職」は21.5%に過ぎず, 「自宅でピアノ, 琴, 茶・華道などの教師をする, 塾を開く」ことを希望する者が51.9%, 残りは「小さな店を開く」などとなっている。これは, 理想と現実とのズレを示していると同時に, 調査対象が大学教

育を受けさせられる家庭の子女であったことも関係していると思われる。

2) 職種とC Pとの関係

B, C, Dの各型と結婚前の希望の職種との関係を表2に示した。また, 表1において, 「結婚時退職」と「出産時退職」を区別せず同質のものと考え, B型とC型の対応する各下位類型（例えばB—1とC—1, B—21とC—21など）は1つにまとめることができる。これを「結婚・出産時退職型」として, その下位類型と職種の関係, 更に就業継続型の下位類型と職種の関係も示した。今回調査対象とした学生の希望

表 2 結婚前の職種と職業経歴類型

職 種		事 務 員	教 公 務 員	幼稚園教員 保 母 他	不 明	計
類 型						
B 結婚時退職型		30 (49.2)	7 (11.5)	15 (24.6)	9 (14.8)	61 (100.0)
C 出産時退職型		30 (50.8)	10 (16.9)	17 (28.8)	2 (3.4)	59 (100.0)
結婚・ 出産 時退職型	B, C — 1	14 (42.4)	6 (18.2)	5 (15.2)	8 (24.2)	33 (100.0)
	—21	12 (60.0)	3 (15.0)	4 (20.0)	1 (5.0)	20 (100.0)
	—22	14 (66.7)	1 (4.8)	6 (28.6)	0 (0.0)	21 (100.0)
	—23	6 (25.0)	5 (20.8)	13 (54.2)	0 (0.0)	24 (100.0)
	— 3	14 (63.6)	2 (9.1)	4 (18.2)	2 (9.1)	22 (100.0)
D 就業継続型	D—1	5 (9.8)	42 (82.4)	1 (2.0)	3 (5.9)	51 (100.0)
	D—2	4 (17.4)	16 (69.6)	2 (8.7)	1 (4.3)	23 (100.0)
	D—3	3 (9.1)	20 (60.6)	9 (27.3)	1 (3.0)	33 (100.0)
	計	12 (11.2)	78 (72.9)	12 (11.2)	5 (4.7)	107 (100.0)

「B対C対D」 $X^2=88.05$, $df=6$, $P<0.001$

「B, C型の対応する下位類型間」 $X^2=30.70$, $df=12$, $P<0.005$

「D型の下位類型間」 $X^2=14.33$, $df=6$, $P<0.05$

する職種は大きく分けると一般事務職と専門職になり、専門職では小・中学校教員、幼稚園教員、保育が多く、他に公務員、エレクトーン教室の講師などが目立った。表2のようにカテゴリーを設けB、C、D型を比較すると、B型とC型の職種の出現率はほぼ同様の傾向を示すが、D型はこの2型と著しく異っている。即ち、前2型を希望する者の職種は事務員が多いのに対し、D型は教員・公務員が圧倒的に多くなっている。全体的に、事務員を希望する者では、結婚・出産を機に何らかの形で職業生活上の変更を考えている者（B、C型）が8割強もあるのに対し、教員あるいは公務員を希望する者では、逆に職業生活上の変更を考えない者（D型）が約8割となっている。また幼稚園教員・保育を希望する者は、7割以上が変更を考えており、同じ専門職であっても教員とは異なる様相を示した。今回の調査では、就業継続希望者に対して「出産・子育ての時期をどのようにして乗りきるか」について自由記述を求めているが、教員希望者の中に、「ほんとうは子どもの小さいうちは

休職したいが、一度やめると再就職が難しいので……」という回答が少なからずみられた。このように、結婚・出産に際し、職業生活における変更を考えるか否かは職業志向の強さなど個人の側の内的要因によるだけでなく、職場の労働条件、再就職の難易など外的要因の作用する面も大であることが未婚者の人生計画にも反映されている。

結婚・出産時退職型の下位類型についてみると、子どもがある程度成長してからの再就職（フルタイム勤務）を考えている者（B、C—23）は幼稚園教員・保育を希望する者に最も多く、事務員ではパート希望者（B、C—22）の方が多くなっている。また一たん家庭に入ったら就業しないと考えている者（B、C—1）も事務員に多い。就業継続型の下位類型に関しての特徴は「50才以後まで同一職種を続ける」者（D—1）では教員・公務員が圧倒的に多く、「ある時期に家内就業に転ずる」者（D—3）は幼稚園教員・保育に多かったことである（転職時の平均年齢29.6才）。

表3 「結婚前」の就業理由

理由		(1)*	(2)	(3)	不明・その他	計
C	D					
B	型	7 (5.7)	70 (57.4)	40 (32.8)	5 (4.1)	122 (100.0)
C	型	15 (12.7)	74 (62.7)	26 (22.0)	3 (2.5)	118 (100.0)
D	型	22 (10.3)	153 (71.5)	31 (14.5)	8 (3.7)	214 (100.0)
計		44 (9.7)	297 (65.4)	97 (21.4)	16 (3.5)	454 (100.0)

数字は第2位選択までの度数、()内は各型での総度数に対する百分率。

$\chi^2=18.37$, $df=8$, $P<0.01$

* (1)経済的必要、(2)経済的自立、能力・技術を活かす、広い視野を持つ。(3)余暇の利用、家庭に閉じこもりたくない。自由に使えるお金が欲しい。(以下の就業理由についても同様のカテゴリー)

3) 就業理由とCPとの関係

結婚前の就業理由(表3)をみると、各類型とも「経済的必要」は少く、「能力・技術を活かす、広い視野を持つ」等が最も多いが、その中でも後者の理由は、 $D>C>B$ の順であり就業継続型を希望する者に多い。「家庭に閉じこもりたくない、自由に使えるお金が欲しい」は、逆に $B>C>D$ の順で、結婚時退職型を希望する者に最も多くなっている。結婚後の就業理由については、各型の就業・非就業のパターンが異なるため、結婚・出産後非就業の下位類型（B—1、C—1）を除いて、共通して回答の多

かった「子離れ後」につき比較を行なった(表4)。「結婚前」の理由に比べ、全体的に「経済的必要」、「余暇利用、家庭に閉じこもりたくない…」が増加し、「能力・視野…」が減少している。BC両型では「余暇利用…」が最も多いのに対し、D型では後者の「能力・視野…」もこの理由と同程度である。以上、一般的に、未婚者が各ライフ・ステージで意識する就業理由が異なること、就業継続型を希望する者では、「自己の能力・技術を活かし、広い視野を持つ機会としての職業」が他型を希望する者よりも強く意識されていることが指摘できよう。

表 4 「子 離 れ 後」 の 就 業 理 由

理由	(1)	(2)	(3)	不明・その他	計
C P					
B 型	19 (23.8)	14 (17.5)	33 (41.3)	14 (17.5)	80 (100.0)
C 型	25 (26.6)	20 (22.4)	41 (42.1)	8 (10.5)	94 (100.0)
D 型	34 (15.9)	79 (36.9)	68 (31.8)	33 (15.4)	214 (100.0)
計	78 (20.1)	113 (29.1)	142 (36.6)	55 (14.2)	388 (100.0)

数字の性質は表3に同じ。X²=20.64, df=6, P<0.005

4) 「妻の生活費負担」に対する意見とC P

表3, 表4の就業理由の(2)には, 「夫とともに稼ぐのが当然であり, 経済的自立が必要と思う」という選択肢も含まれているが, 就業継続型を希望する者でも「結婚・出産期」の就業理由として第2位までにこれを選択したのは24.3%に過ぎない。男性の場合, 一般に「就業」は生活費の負担と不可分に意識されていると考えられるが, 女性の場合はどうか。前回の調査結果(池田他⁷⁾)では, 既婚者の場合は(1), (2)の「夫が稼ぐのが当然」と(3)の「妻も負担して当然」とがほぼ同数であり, 就業継続群の回答傾向も他群と変わらぬが, 未婚者では「自分の娘に期待するC P」として就業継続型を選んだ者に(3)の回答が多く, 「夫が稼ぐのが当然」とする者の多い結婚時退職型と対照的であった。今回の未婚者についての結果(表5)もほぼ同様の結果であり, B型, C型では「夫が稼ぐのが当然」が多く, D型では「妻も負担して当然」が多くな

っている。B, C型の下位類型を比較すると, B, C—3群(結婚・出産を機会に家内就業に転ずる)で「妻も負担して当然」が他群より多く, D—1群とほぼ同率であることが目立つ。この群は, 転職はするが, B, C型の他群のように就業を中断することを考えない者であり, このような意識を強く持っていることと対応する。また, 子どもがある程度成長してからパートあるいはフルタイムの勤務に就くことを希望する者(B, C—22, —23)では他群より「夫が稼ぐのが当然だが経済状態によっては妻も負担せざるを得ない」が多くなっていることも特徴である。D型では「50才以後まで同一職種を続ける」者(D—1)に「妻も負担して当然」とする者が多い。しかし, 「当然」とするものは, この群でも6割強, D型全体で約半数であり, 未婚の女性にとって職業生活と「生活費を稼ぐ」役割を積極的に荷うこととはかなり独立したものとしてとらえられていると言えよう。

表 5 「妻の生活費負担」に対する意見

意見		(1)妻は負担する必要なし	経済状態によ(2)つては負担せざるを得ず	(3)妻も負担して当然	不 明	計
C P						
B 型		2 (3.3)	29 (47.5)	24 (39.3)	6 (9.8)	61 (100.0)
C 型		2 (3.4)	34 (57.6)	22 (37.3)	1 (1.7)	59 (100.0)
B, C 型	— 1	0 (0.0)	18 (54.5)	12 (36.4)	3 (9.1)	33 (100.0)
	—21	2 (10.0)	8 (40.0)	8 (40.0)	2 (10.0)	20 (100.0)
	—22	1 (4.8)	13 (61.9)	6 (28.6)	1 (4.8)	21 (100.0)
	—23	1 (4.2)	17 (70.8)	5 (20.8)	1 (4.2)	24 (100.0)
	— 3	0 (0.0)	7 (31.8)	15 (68.2)	0 (0.0)	22 (100.0)
D 型	— 1	0 (0.0)	14 (27.5)	33 (64.7)	4 (7.8)	51 (100.0)
	— 2	0 (0.0)	11 (47.8)	11 (47.8)	1 (4.3)	23 (100.0)
	— 3	2 (6.1)	15 (45.5)	15 (45.5)	1 (3.0)	33 (100.0)
	計	2 (1.9)	40 (37.4)	59 (55.1)	6 (5.6)	107 (100.0)

「B対C対D」X²=9.51, df=4, P<0.05

「D—1対D—2, D—3」X²=4.21, df=2, P<0.02

「B, C型の下位類型間」X²=16.51, df=8, P<0.05

(以上の分析は「必要なし」と「不明」はコミで行なった)

5) 結婚時退職型と出産時退職型の比較

「結婚時退職」を選択する者と「出産時退職」を選択する者の相違については、田中他⁸⁾(1976)、池田他⁷⁾において問題とされているが明確な説明を得るには至っていない。今回の調査結果からはB、C兩型とも全く同じ下位類型が出現していることが第一に指摘でき(表1)、未婚者においては職業生活上の変更の契機を「結婚」とするか「出産」とするかにかかわらずその後の就業・非就業のパターンについては同様の種類が考えられていると言えよう。ただし各下位類型の出現率にはB、C兩型間でいくらか違いがみられ、結婚時退職型では「以後非就業」(B-1)の者が、出産時退職型では「一時中断後フルタイム勤務」(C-23)の者の割合が多くなっている($X^2=6.75$, $df=2$, $P<0.05$)。また、退職後「非就業」の者はB型で34.4%, C型では20.4%(表1)であり、「出産時退職」を選ぶ者が就業志向がやや強い傾向を示している($X^2=2.98$, $df=1$, $P<0.10$)。次に、職種および就業理由につき、兩型の対応する各下位類型間で比較を試みたが明確な差はみられなかった。また、職業生活を再開する場合(B-2, C-2)の末子の平均年齢も、B型4.6才、C型4.8才とほとんど差がない。C型の者が結婚時に退職せず、出産まで就業す

ることを希望する理由については、「結婚・出産期」の就業理由として、回答した者29人(49.2%)のうち17人(58.6%)が「経済的必要」を挙げていることから推測できる。しかし、一方この期の就業理由無回答の者が約半数あったことは、調査対象となった年齢の女性が、「結婚」と「出産」の自己にとっての意味を区別していないことを示すとも考えられる。

以上、上述の分析項目については、出産時退職型の方が就業志向がやや強い事以外兩型の間に明確な差はみられなかった。むしろ、B、Cを区分せず「結婚・出産時退職型」とした場合での下位類型間の差異の方が指摘し易かったと言える。

6) 就業継続型の下位類型の検討

今回の調査結果で注目すべきことは、一般に職業生活にとって、最も難関と考えられる出産・子育てという時期には就業を継続しながら、その後家内就業に転じたり、退職したりするパターンを理想と考える者が相当数あったことである。暫定的に上記の3つの下位類型に分けたが、ここで「少なくとも50才までは同一の職種での就業を継続する」群を「完全就業継続型」(D-1)と仮称し、他の2群との関係を検討する。

表6 「結婚・出産期」, 「子育て期」の就業理由(D型)

理由 C P-S	(1)	(2)	(3)	不明・その他	計
D-1	43 (21.1)	95 (46.6)	28 (13.7)	38 (18.6)	204 (100.0)
D-2	28 (30.4)	30 (32.6)	6 (6.5)	28 (30.4)	92 (100.0)
D-3	43 (32.6)	43 (32.6)	8 (6.1)	38 (28.8)	132 (100.0)

数字は2期の第2位選択までの度数の合計。

$X^2=21.24$, $df=6$, $P<0.005$

「50才未満で退職し、以後非就業」の群(D-2)については、安田他⁹⁾(1976)の「結婚後5年間は継続」という基準を採れば、大多数がこれに合致するのでD-1群と分かつ理由はない。しかし、この群では退職時の本人の年齢の範囲が28才~45才、同じく末子の年齢が0才~17才と範囲が大であり、同一の下位類型として扱うことが疑問であった。3群について職種

の比較をすると、上述のように(表2)幼稚園教員・保母を希望する者にD-3型(ある時期に家内就業に転ずる)が多く、小・中学校教員希望者では約半数が完全就業継続型であることが特徴であった。また就業理由について比較すると、「結婚前」の理由には差がみられなかったが、「結婚・出産期」および「子育て期」では、全体に「経済的必要」が増加する傾向があ

表 7 「子離れ後」の就業理由 (D型)

CP-S \ 理由	(1)	(2)	(3)	不明・その他	計
D-1	17 (16.7)	48 (47.1)	24 (23.5)	13 (12.7)	102 (100.0)
D-2	7 (15.2)	13 (28.3)	14 (30.4)	12 (26.1)	46 (100.0)
D-3	10 (15.2)	18 (27.3)	30 (45.5)	8 (12.1)	66 (100.0)

$$X^2=15.95, df=6, P<0.05$$

るが、完全就業継続型では「結婚前」の理由と同様「能力、広い視野、経済的自立」が最も多いことが目立つ(表6)。「子離れ後」については、完全就業継続型では依然「能力…」が多いのに対し、家内就業に転ずる者(D-3)では「余暇利用、……」が多いことが指摘できよう(表7)。更に「妻が生活費を負担すること」に関する意見については、上述のように(表5)完全就業継続型では「妻も負担して当然」とする者が65%であり「夫が稼ぐのが当然だがやむを得ず」とする者を大きく上回ったが、他の2群では、この2つの回答が同率であった。以上、完全就業継続型対他群という対照が見られる。完全就業継続型を希望する者には、職業に「能力・技術を活かす、視野を広める」等の意味を与え、同時に、単に補助的にではなく、夫と同等に生活費を稼ぐ役割を分担することを考えている者が他群よりも多いと言える。

次に、D-2、D-3群の中でも、退職あるいは転職時の末子の年齢(従って結婚後の勤続年数も)の範囲が大きく、均質の群とは考えにくいので、転・退職時の末子の年齢と就業理由との関係を検討した。D-2群(50才未満で退職以後非就業)ではライフステージ5期のどこ

かで退職するため、就業理由の比較は結婚・出産期、子育て期に限ったが、末子の年齢との関連は得られなかった。D-3群では図1に示されたように転職時(主に家内就業への移行)の末子の年齢が7才以上の所で「能力…」と他の理由との差が大きくなり、年齢が増すにつれこの差も増大して、完全就業継続型の就業理由の選択率に近くなってくる。転職後の職種は「茶・華・書道、ピアノ、塾の教師」など趣味を活かしたものが圧倒的に多い。

以上、末子の年齢6才が変化の境であること、また上述のように「結婚・出産、子育て」期の就業理由は「経済的必要」が多いことを考慮すると、「経済安定退職型」とも呼ぶべき類型を設定することが必要であると思われる。

§ 4. 「女性であること」に対する評価

1) 女性生の受容および性の選択と職業経歴類型

「女に生れて良かったと思うか」、「男女どちらに生れたいか」に対する反応をB, C, Dの各類型について比較したものが表8, 9である。全体としては、女性生を受容する者73.1%再び女に生れたい者45.7%と、上述の1973年の「国民性調査」の結果や、伊藤他²⁾の未婚者についての結果に比べ特に異なつた傾向は見られなかったが、希望するCPとの関係を検討した結果、ここでも就業継続型が他の2型とは異なつた反応率を示した。即ち、結婚時あるいは出産時退職を希望する者では8割以上が「女性に生れて良かった」としているのに対し、就業継続希望者では約6割に減じ、逆に「良かったと思わない」者が3割以上あった。性の選択についても、前者では「女希望」が「男希望」を上回っているのに対し、後者では「男希望」が多くなっている。また、表では「その他」に含め

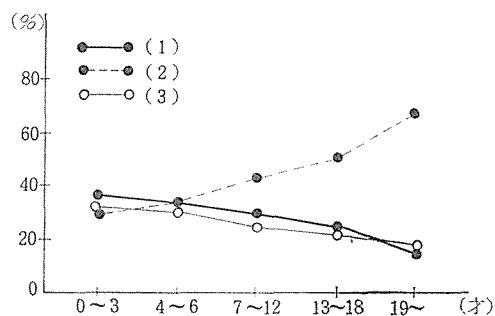


図1 D-3群の全ライフステージの就業理由の総度数に対する各理由カテゴリーの百分率と末子の年齢との関係

表 8 「女に生れて良かったと思うか」

反応 C P	は い	い い え	そ の 他*	計
B 型	51 (83.6)	7 (11.5)	3 (4.9)	61 (100.0)
C 型	48 (81.4)	9 (15.3)	2 (3.4)	59 (100.0)
D 型	72 (63.2)	36 (31.6)	6 (5.3)	114 (100.0)
計	171 (73.1)	52 (22.2)	11 (4.7)	234 (100.0)

* 「わからない」, 「どちらでもよい」, 無回答を含む。(以下同じ)

$X^2=12.26$, $df=4$, $P<0.02$

表 9 「男女どちらに生れたいか」

反応 C P	女	男	そ の 他	計
B 型	33 (54.1)	18 (29.5)	10 (16.4)	61 (100.0)
C 型	33 (55.9)	24 (42.1)	2 (3.4)	59 (100.0)
D 型	41 (36.0)	57 (50.0)	16 (14.0)	114 (100.0)
計	107 (45.7)	99 (42.3)	28 (12.0)	234 (100.0)

$X^2=13.68$, $df=4$, $P<0.01$

られているが, 「どちらでもよい」という反応は極く少数(0.4%)ではあるが, D型のみにみられた反応であった。

この2つの問に対する回答をクロスさせたものが表10であるが, 全体的特徴として, 女性生を拒否する者はほとんど全員「男に生れ変る」ことを希望する一方, 女性生を受容する者もその3分1は「男希望」であることが指摘できる。1975年の調査(伊藤他²⁾)では, 未婚者・既婚者とも, 女性生受容者のうち「男希望」は約5分

の1であったのに比べ増加している。池田他⁴⁾においては, 「受容—男」反応は若い世代に多いことが指摘されているが, これが一つの時代的傾向として今後も続くか否かについては今後の調査を待たねばならない。CPとの関係をみると, 結婚時あるいは出産時退職希望者では「受容—女」が約5割で最も多く, 次いで「受容—男」が2割強となっているのに対し, 就業継続希望者では「受容—女」は3割強であり, 「拒否—男」とほぼ同率であった。

表 10 女性生を受容と性の選択との関係

女性生 性の選択 C P	受 容		拒 否		そ の 他 の 組 合 せ	計
	女	男	女	男		
B 型	32 (52.5)	14 (23.0)	1 (1.6)	4 (6.6)	10 (16.4)	61 (100.0)
C 型	30 (50.8)	16 (27.1)	1 (1.7)	8 (13.6)	4 (6.8)	59 (100.0)
D 型	40 (35.1)	21 (18.4)	0 (0.0)	34 (29.8)	19 (16.7)	114 (100.0)
計	102 (43.6)	51 (21.8)	2 (0.1)	46 (19.7)	33 (14.1)	234 (100.0)

$X^2=19.80$, $df=6$, $P<0.005$ (但し, 「拒否—女」と「その他」をコミにした検定)

2) 「理由」のカテゴリー化

上記2つの問への回答に対し, その理由の自由記述を求めたが, これを整理し, 次のような

カテゴリーを設けた。

1 個人的条件: 自己の条件に重点を置いたもので以下の3つに分けられる。

1. 現在の自分の状況に対する満足度
2. 自分の性格からの判断
3. 現在女性であることを根拠とするもの

Ⅱ 女性役割：直接的に女性役割に触れ、これを積極的に受容あるいは拒否したもの。

1. 一般的に、女としての生き方、生きがいがあることに言及したもの
2. 「母親」としての役割
3. 「妻」としての女性
4. 女性の一般的特性

Ⅲ 男性役割：判断の比重が男性役割に置かれているもので次の2つの側面に分けられる。

1. 経済の担い手としての男性、社会的責任の重さが強調されているもの

2. 男性の一般的特性

Ⅳ 社会との関係：社会における両性の立場の比較から判断したもの。

1. 学歴重視の競争社会に関係したもの
2. 「自己実現」の難易、社会的拘束に触れたもの
3. 両性の社会的地位

以上の枠組に従い、4つの反応の代表的回答理由を附表1、2に示した。

3) 職業経歴類型別にみた「理由」

上述のカテゴリーに従いCP別に出現度数を示したものが附表3である。さらに、その百分率を、表11、12に示した。

表 11 女性生の受容の理由と職業経歴類型

理由	C P	受 容				拒 否		
		B 型	C 型	D 型	全 体	B, C 型	D 型	全 体
Ⅰ	1	11.4	21.1	19.6	17.4			
	2	18.2	2.6	7.1	9.4			
Ⅱ	1～3	29.5	47.4	39.3	38.4	5.3	11.8	9.4
	4	11.4	5.3	8.9	8.7	15.8	8.8	11.3
Ⅲ	1	22.7	31.6	25.0	26.1		5.9	3.8
	2						11.8	7.5
Ⅳ	1	6.8	7.9	7.1	7.2			
	2	2.3		1.8	1.4	68.4	64.7	66.0
	3		2.6	5.4	2.9	10.5	26.5	20.8
回 答 者 数		44	38	56	138	19	34	53

数字はC P別度数の回答者数に対する百分率。分類された「理由」は1名につき1つとは限らぬ。

女性生受容の理由(表11)で最も多いのは「子
を産み育てられる」、「女性としての特性は十分
開拓しがいがある」、「愛される喜び」など、
女性の特性、性役割を積極的に評価したもので
あり(約4割)、中でも「子を産み…」を挙げた
者が多かった。次いで、生計の担い手としての
男性の大変さ、責任の重さを強調し、「女の方が
楽だから」とするもの、さらに積極的に「自由
がある、生活にゆとりがあるから」とする者が
約3割あった。また2割近くの者が「現在の
生活が楽しいから」「今の自分で満足」などの
理由を挙げている。

これを性の選択との関係でみると(附表3)、
「男は大変、女性は楽」という理由(Ⅲ—1)
を挙げた者のうち8割(29/36)、また「学歴社
会・競争社会の厳しさ」(Ⅳ—1)を理由とし
た者は全員(10/10)「女希望」であつたの
に対し、「現在の自分に満足」(Ⅰ—1)とした者
および「子を産み育てる…」等(Ⅱ1～3)の
理由を挙げた者の約5割は「男希望」であり、
女性生を受容しながら「男希望」である者の8
割($13+24/44$)は女性としての自分の生活に満
足し、女性役割を肯定している者であつた。C
P別にみると(表11)、結婚時退職型において、

表 12 性の選択の理由と職業経歴類型

性の選択 C P 理由		女				男			
		B 型	C 型	D 型	全 体	B 型	C 型	D 型	全 体
Ⅰ	1	14.8	6.3	13.8	11.4			2.0	1.2
	2	11.1	9.4		6.8				
	3					13.3	23.8	8.0	12.8
Ⅱ	1～3	7.4	9.4	17.2	11.4		4.8	2.0	2.3
	4		3.1		1.1				
Ⅲ	1	63.0	46.9	34.5	47.7			2.0	1.2
	2					6.7	4.0		3.5
Ⅳ	1	25.9	31.3	24.1	27.3		4.8		1.2
	2	3.7		10.3	4.5	60.0	57.1	72.0	66.3
	3		6.3		2.3	20.0	19.0	18.0	18.6
回 答 者 数		27	32	29	88	15	21	50	86

数字の性質は表11と同じ

他型では少い「自分の性格は男性に向かない」が約2割選択されていること、出産時退職型で女性役割の積極的評価（Ⅱ 1～3）が約5割と最も多いことが目立つ。また、伝統的な女性役割からは逸脱したCPである就業継続型においても、女性生を受容する者の多くは、女性役割を積極的に評価している者であると言える。

女性生の拒否の理由は、「やりたいことがやれぬ」「拘束されることが多過ぎる」など自己実現に対する制約の多さを挙げたものが最も多い。次いで男女不平等に触れたものが多くなっている。上述のようにこの群のほとんどは「男希望」者であり、就業継続型希望者が多いが、「自己実現」「やりたいこと」の内容としては伝統的な女性役割（例えば、子育て）とは別の「生きがい」「仕事」が強く意識されているようである。また就業継続型では「男性的世界」への憧れを表明したり、男女平等でないことを意識する者の多いことが他型と異なる特徴である。

次に性の選択に関して（表12）、「女希望」の理由についてみると、女性生を受容とは異なった様相を示し、女性役割の積極的肯定はわずかであるのに対し、男性の大変さ（Ⅲ—1）を理由とする者が5割近くにのぼり、学歴主義の競争社会に言及した者（Ⅳ—1）を加えると、全体の4分の3に達する。この群はほとんどが女性

生を受容する者であるが、前述の結果と合せて考察すると、競争社会での男性役割の厳しさ、大変さを特に意識し、相対的に女性の方が苦勞が少いことを理由として女性生を受容する者の多くは同じ理由によって再び女に生れることを希望すると言えよう。この群でも、単に楽だから、逃げ道があるから、ということではなく、「立身出世に目の色変えず内面的生き方をみつけられる」「女の方が自由」など男性社会への批判的観点を含んだ理由も見られたが極く少数であった。CP別にみると、結婚時退職型で「男は大変、女は楽」という理由（Ⅲ—1）が最も多く（6割強）、就業継続型ではこの理由は少い（3割強）ことが指摘できる。

「男希望」の理由では、女性生拒否の理由と同じく「自己実現」に関するものが最も多くなっているが、「自己の能力を十分に試し伸ばせる」「自分の生き方をみつけ情熱を傾けたい」など積極的な表現が目立つ。次に多いのが「男性に有利な社会だから」などの理由（Ⅳ—3）であり、これも女性生拒否の理由と同じ傾向だが、「今女だから今度は男に生れ別の面を知りたい」（Ⅰ—3）という理由の特徴的である。この群ではCPによる差が目立ち、就業継続型では「自己実現」と「男性に有利な社会」で9割を占めるのに対し、出産時退職型では「別の面を知りたい」が2割強と他型より多くなって

いる。また附表3にみるように女性生を拒否して男を希望する者の理由は「自己実現」が8割強(36/44)であるのに対し、女性生を受容しながら男を希望する者では自己実現が5割(21/42)、「別の面…」が2割強(10/42)である。後者では上述のように女性としての自分に満足し女性役割を肯定する者が多かったが、このような理由で女性生を受容し、次に男に生れることを希望する者は、女性の特性とは別の側面での自己実現の可能性にひかれている者が多いと言えよう。

以上のことから、「女性であること」をどう評価するかについて少なくとも3つの特徴的なタイプが指摘できると思われる。第1は、「男性は稼がねばならず苦労も責任も大きいから絶対いや」というタイプであり、このタイプの者では現代の競争社会の厳しさと「稼ぎ手」としての男性の役割が非常に強く意識されている。第2のタイプは、「女性は女性としての生きがいがあり楽しいが、男性にもなって別の面で自分を試してみたい」というタイプである。このタイプの者では、両性のそれぞれプラスに評価できる側面が意識されている。第3のタイプは、「女性は制約ばかり多いからいや、男性になって自分の道を進みたい」というタイプであり、伝統的性役割に台致すること以外の何かに専心しようとする場合の女性の制約の多さが強く意識されている。前二者のタイプは結婚・出産時退職型に多く、後者は就業継続型に多い。第1のタイプも第3のタイプも「社会における男性」という同じ側面を意識しているがその把握の仕方は全く逆になっている。これは上述のように、職業生活が必ずしも「稼ぎ手」としての役割と結びつけて考えられてはいないという事実にも関係するだろうが、ある意味では、第1のタイプの方が現実を厳しく認識しているとも言えよう。第3のタイプの者の中に「男なら自分がこれだと思った道をどんな障害があっても絶対に乗り越えて進むことができると思う」と述べたものがあつたのに対し、女性生は拒否するがそれでも再び女に生れることを希望している者が、「今の社会制度では自分のしたいと思うことは男であつてもなかなかできない。それならいっそ男性に依存してしまった方が楽」として

いたのが印象的であつた。このような視点の相違、認識の違いが何に由来するかは今後の課題としたい。

§ 5 要 約

女子学生の理想とする職業経歴類型と女性生の受容、性の選択について検討し、以下の点につき示唆を得た。

1. 結婚時退職型と出産時退職型に関し同種の下位類型がみられる。両型の相違は、就業志向性の差、「女性であること」の評価の理由などにみられたが明確でなく、両型あわせ「結婚・出産時退職型」とした場合の下位類型間の相違がいくつか指摘された。
2. 就業継続型に明確な下位類型がみられ、完全就業継続型と経済安定退職型の設定の必要性が指摘された。
3. 就業に関する項目、女性生の受容、性の選択への反応につき、「結婚・出産時退職型対就業継続型」という対比のパターンが多くみられた。
4. 女性生の受容、性の選択の理由を個人的条件、女性役割、男性役割、社会との関係という4つの視点からカテゴリー化して職業経歴類型との関係等が検討され、3つのタイプが指摘された。

引 用 文 献

- 1) 総理府編 1978 「婦人の現状と施策」
- 2) 伊藤裕子他6名 1977 女性の生活史に関する研究Ⅲ 2. 自己の生活歴とその評価 教心第19回総会発表論文集 446—447
- 3) 本田時雄他6名 1978 女性の生活史に関する研究Ⅳ 2. 世代を中心としたまとめ 教心第20回総会発表論文集 144—145
- 4) 池田政子他6名 1978 女性の生活史に関する研究Ⅳ 1. キャリア・パターンからみた生活史と性役割観の変化 教心第20回総会発表論文集 142—143
- 5) 本田時雄他6名 1977 女性の生活史に関する研究Ⅲ 3. 4つの要因を中心として 教心第19回総会発表論文集 448—449
- 6) 田代俊子 1974 女子青年の人生計画 I 職業経歴類型を中心に 県立新潟女子短期大学研究紀要 第11集 9—15
- 7) 池田政子他6名 1978 女性の職業経歴類型と性役割観——生活史分析の視点——山梨県立女子短期大学紀要 第11号 67—92
- 8) 田中政子他6名 1976 女性の生活史に関する研究Ⅱ 1. 職経験を中心とする生活歴の類型 教心第18回総会発表論文集 328—329
- 9) 安田三郎他 1976 「婦人の職業とライフサイクル」 職研調査研究報告書 No. 4 職業研究所

附表 1 女性生の受容に関する「理由」

カテゴリー	受 容	拒 否
I — 1 — 2	女としての現在の自分に不満なし 自分の性格は男に向かない（弱い、責任感ないなど）。	— 2 自分は女性に要求される性質が苦手
II — 1 — 2 — 3 — 4	女性でなければならない事、女としての生きがいがある。 子を産み育てられる。母としての喜び。 愛される喜び。幸せな家庭で過したい。 女性のやさしさ、思いやりが好き。男より素直に生きられそう。	— 2 出産に対する恐怖感。 — 3 家事に縛られたくない。 — 4 精神的・肉体的ハンディがある。女性特有の性格がきらい。
III — 1	男は妻子を養うため必死で働かねばならないが女は経済的なことは夫に任せられる。女は甘え、頼ることが許されるので男より楽で生き易い。逃げ道がある。責任の軽い分だけ自由で生活を楽しめる。	— 2 男の世界、厳しさへのあこがれ。 男性のおおらかさへのあこがれ。
IV — 1 — 3	出世、競争にやっきにならずにすむ。男はいい大学・会社へ行かねばならない。 ある程度女の地位も向上。今まで差別、束縛感じたことない。	— 2 女は多くのことを要求される。結婚しない女に理解がない。自立が難しい。狭い社会で生きねばならぬ。自分が一生かけてしたいこと、夢を追えぬ。男より可能性少い。拘束されることが多すぎる。 — 3 男女不平等。損するのは女。同じことをしても認められぬ悔しさ。

数字は本文対照のこと。

附表 2 性の選択に関する「理由」

カテゴリー	女	男
I — 1 — 2	現在の自分に満足。 自分の性格は女に向いている。男では重荷すぎて人間的に参ってしまう。	— 1 女に生れて良かったと思うこと今までない。 — 3 一度男になってみたい。別の面を知りたい。
II — 2 — 3 — 4	子が産み育てられる。 男性に支えられて生きることが理想。 女性のこまやかさ、やさしさを大切にしたい。	— 2 結婚・出産せずにすむ。
III — 1	男性に要求されるものが重過ぎる。家族を養うのに大変。責任重い。女の方が甘えが許されるし気楽。逃げ道多いから得。苦労少い。結婚を手段として安定した生活できる。自分の時間多く女の方が自由。経済を考えることなく働ける。	— 1 責任感強く持てる。苦労を味わいたい。 — 2 男性の持つ特性が好き。性的理由。
IV — 1 — 2 — 3	立身出世に目の色変えず内面的生き方をみつけられる。男なら頭が良くないと困る。学歴を気にせず勉強できる。競争社会についてゆけぬ。男は社会的地位を確立するのに大変。 今は女でも自分の生き方できる。 これからは女性の地位も向上する。	— 1 厳しい世相であるからこそ男の方が生きがいがある。 — 2 仕事に打ち込める。男の方が自由、女は制約多い。自分の能力を十分伸ばせる。家庭、子どもに縛られず「自分」を大切にしたい。自分の生き方に確かな責任を持って生きぬいてゆける。自分の生き方をみつけ情熱を傾けたい。女は自立しにくい世の中である。男はやりたいことできる。 — 3 男は1つもめんどろなことなく、損することない。男性に有利な社会。女性差別あり。

附表 3 職業経歴類型と「理由」

理由	C 反応 P	女 性 生									性 の 選 択													
		受 容 ※1								拒 否			女			男 ※2								
		B 型		C 型		D 型		計		B	C	D	B	C	D	B 型		C 型		D 型		計		
Ⅰ	1	3, 2	5	5, 3	8	3, 8	11	11, 13	24				4	2	4					1, 0	1	1, 0	1	
	2	7, 1	8	1, 0	1	2, 2	4	10, 3	13				3	3										
	3															0, 2	2	0, 5	5	1, 3	4	1, 10	11	
Ⅱ	1	2, 2	4	4, 1	5	1, 4	5	7, 7	14					1	1			0, 1	1	1, 0	1	1, 1	2	
	2	4, 2	6	7, 4	11	7, 6	13	18, 12	30			2	2	2	3									
	3	1, 2	3	1, 1	2	2, 2	4	4, 5	9	1		5			1									
	小計	7, 6	13	12, 6	18	10, 12	22	29, 24	53	1		4	2	3	5			0, 1	1	1, 0	1	1, 1	2	
	4	5, 0	5	0, 2	2	5, 0	5	10, 2	12	1	2	3		1	5									
Ⅲ	1	8, 2	10	11, 1	12	10, 4	14	29, 7	36			2	17	15	10					1, 0	1	1, 0	1	
	2										4					0, 1	1		0, 2	2	0, 3	3		
Ⅳ	1	3, 0	3	3, 0	3	4, 0	4	10, 0	10				7	10	7			0, 1	1			0, 1	1	
	2	1, 0	1			1, 0	1	2, 0	2	3	10	22	1		3	3, 6	9	7, 5	12	26, 10	36	36, 21	57	
	3			1, 0	1	3, 0	3	4, 0	4	1	1	9		2		0, 3	3	1, 3	4	5, 4	9	6, 10	16	
回答者数		32, 12	44	27, 11	38	35, 21	56	94, 44	138	6	13	34	27	32	29	3, 12	15	8, 13	21	33, 17	50	44, 42	86	

※ 1 各 C Pにつき、太字はそのカテゴリーに分類された人数を、また細字は性の選択では「女希望の者」、「男希望の者」の順でそのうちわけを示した。

※ 2 “ 女性生では「拒否の者」、「受容の者」の順でそのうちわけを示した。